岩屋城（絵島ヶ丘城）（指定なし）（兵庫県淡路市岩屋古城跡）

天正９年（1581）淡路島は羽柴秀吉により平定され、仙石秀久が洲本城に入って淡路を治めた。天正 13 年（1585
讃岐高松城に移った秀久に替わり、脇坂安治が淡路に入部する。
安治は水軍を率いて文禄・慶長の役に参戦する。関ヶ原では西軍に付いたが、当初より徳川家康と通じており、本戦では西軍の平塚為広、戸田勝成の両隊を壊滅させて所領を安堵された。
安治は慶長14年(1609)伊予大洲城に移封され､藤堂高虎預かりとなり代官が入ったが､翌慶長15年(1610)、淡路は池田輝政の三男で家康の外孫の忠雄が６万石で領することとなり、輝政は洲本城に代わり新たに岩屋城を築いて、９歳の忠雄に代えて代官を置いた。
しかし、慶長 18 年（1613）、淡路に入国した忠雄は岩屋城に替えて由良に新城を築き移ったので、この岩屋城はわずか４年ほどで廃城となった。
城跡の先の岩屋港近くには伊弉諾と伊弉冉の国生みで最初に生れた「おのころ島」との伝説がある絵島がある。「平家物語」では平清盛が絵島の上の月を愛でながら歌会を催したとあり、西行法師は「山家集」の中で「千鳥なく　絵島のうらに　すむ月を　波にうつして　見るこよいかな」と歌っており、古くからの月の名所だった。
「斎藤摂津守の城郭訪問記」による

この地域には岩屋城という城が２か所あり、この城の北西約２ｋｍのところにもう一つの岩屋城（松尾城・マナイタ山城）があった。ここでは混同を避けるため絵島ヶ丘城と称することとする。
　絵島ヶ丘城は淡路市岩屋にある絵島と大和島のあいだを結ぶ国道２８号線の西側の丘陵である。本丸台は標高約 31m東西 26m南北 50mの広さで、ここを中心に北の丸・南の丸、北の丸北側と本丸東側の細長い一廓（住居の跡のようでもあるので後世の削平地かもしれない）がある。本丸並びに北の丸は石垣が取り除かれた影響でいたるところで土砂の崩壊が見られる。特に本丸西側の崩落が激しい。また南の丸はその土地が工場などとして利用されていたため簡単に辿り着けたそうであるが、2012 年 12 月 2 日の時点では藪の中であった。
◎特記
本丸と南の丸に 3 人で登城したが、各種本やブログで書かれている通り藪化がはげしくおまけに荊が多いので苦労した。一人での登城困難でしょう。また多くの瓦片が散布しており南の丸から本丸に登るところで揚羽蝶の軒丸瓦の破片を採取した。
◎歴史
絵島ケ丘城は、慶長１５年（1610）徳川幕府が大坂の豊臣方に睨みを聞かせるための拠点として、淡路を与えた池田輝政によりこの地に築かれた。(形式は家康孫で輝政三男である忠雄の所領ということであるが、当時元服後間もない９歳という若齢であったため実質は輝政により築城されたものであろう。)それまでの岩屋城は大阪湾・瀬戸内海を一望できる位置にあったが、絵島ヶ丘城は大阪湾の睨みを主とする軍事的役割を担って構築されたものであろう。
　しかしこの城の寿命は短く慶長１８年（1613）輝政の三男忠雄を淡路に赴任させ由良成山に新城を築くこととなる。その折当城の建築材や石垣の大部分を由良へ搬出したといわれる。また残った石垣は岩屋の町中で再利用され、茶間川の護岸や岩屋の波止また石屋神社の手洗い石などにも刻印のある石材が残る。なお、由良へ搬出された石材は由良城が廃された後、幕末から明治にかけての成ヶ島由良要塞の台場の石垣として今も多く残っている。
参考史料

兵庫県の中世城館・荘園遺跡　昭和５７年　兵庫県教育委員会
日本城郭体系　第１２巻　昭和５６年　新人物往来社
ひょうごの城　新版　神戸新聞總合出版センター　上記いずれも山本幸夫氏
淡路考古学研究会誌　創刊号　岩屋城石垣石刻印集成　波毛康宏氏
「淡路島のお城」による